さて、私は友人である成歩堂に好意を寄せている。
もちろん当然であるが友情という意味では無く、本来ならば男女間に成立させるべき愛情を彼に抱いていた。
何時から好きだったかなんて正直なところ覚えていない。気がついたら好きだった。自覚した瞬間にはもう取り返しがつかないほど、まるで坂の上から転がり落ちる勢いで私は彼への恋に落ちてしまっていた。
彼に恋をしてからと言うものの、私の世界は途端、極彩色になった。
その中でも彼が身に纏う青は特別色鮮やかに見えて、ああこれが世界が変わって見えると言うことなのかと比喩を身をもって体感することになった。
彼が隣にいてくれるだけで嬉しくて仕方が無くて、その上私の名前を呼んでくれるだけで幸福でたまらない。もっともそれを顔に出すことはしなかったが。
私はそれまで自分を異性愛者だと思っていた。漠然とではあるが父が母を愛したように、また母が父を愛したように女性を愛して家庭を持つものだとずっと信じていたのだ。成歩堂への恋に落ちる瞬間までは。
しかしよくよく考えれば私は誰に対してもそう言った感情を抱いたことが無く、初めて好きになったのは彼なので言わば同性愛者なのだろう。
さて、私は成歩堂に恋をした。確定事項である。
しかし父を喪ってから今に至るまでひたすら検事になるための勉強を、なってからは検事として研鑽を積んできたのでそういった知識には自信はあるが、恋愛については全く知識がないことに気づいて愕然とした。
彼のことが好きだ。友情でも無い、愛情を抱いている。
しかしその気持ちの後にどうすればいいのかさっぱり分かっていなかった。
誰かに聞こうにも同性愛は世間に於いて異端とされている。私だけでは無く成歩堂も非難の目に晒されるのは耐えがたく、また友人が彼と、彼と繋がりのある男しか私にはいなかったので聞くにも聞けず、私はネットや雑誌、ありとあらゆるツールを使って恋愛について調べ始めた。
さて、性交渉に於いて男性は端的に言うと突っ込む側である。
身体構造上そうできているのだから自身を凸と考えるのは自然であり、私は成歩堂を抱きたいと思ったのかと思いきや、抱かれたいと考えた。
というよりも、愛されたいと願ったのだ。
恐らくそれは愛情に飢えた幼少時代が起因しているのだ

ろう。最も父とそういった関係になりたいと思ったことは毛の一筋程も無いが。

それはさておきありとあらゆる情報を調べ、色々と思考を巡らせた結果私はこの恋に対する結論を導き出した。

といよりもそれしか答えが出なかった。

私の恋は一生誰にも気づかせてはならない。

出来ることなら、可及的速やかに、この世から消し去ってしまわなければならない。それが結論であった。

成歩堂は性的にノーマルな男である。少なくとも私は三人程、彼が女性と交際していた事実を知っている。つまり彼はどこにでもいる普通の男なのだ。

この時点で私の勝算は限りなくゼロに近い。

もし私がとち狂って彼に恋心を告げたとして、どうなるだろう？

きっと彼は困惑するだろう。それどころか嫌悪、忌避されるかもしれない。それが普通の反応なのだ。

つまりそこで私は友人としての成歩堂も喪うのである。

弁護士と検事である、仕事とプライベートは切って分けるだろうが、生理的な感情は、自分では制御できないものだ。

ふとした瞬間にそういった感情をぶつけられたら、滲ませられたら私はきっと思いを告げた自分を許せなくなる。

どうして、何故告げたのだと。

だから、彼にとって迷惑にしかならないこの恋は、この世に少しの種も残さないように、消し去ってしまわなければならないと思った。

何度も何度も考えて、それが結論だ。私の恋に待ち受けるのは幸せな終わりでは無い。どちらかというとその真逆だ。

いくら恋に目が眩んでいる私にだって分かる。この恋は、育つだけ育って実もなさないまま、自分の手で枯らしてしまわなければならない恋だ。

あだ花よりも咲く甲斐の無い恋だった。